

随想

著者	太田 節子
雑誌名	星薬科大学一般教育論集
号	26
ページ	1-13
発行年	2008
URL	http://id.nii.ac.jp/1240/00000238/

随想

太田 節子

薬剤師になるはずが、思いがけず教育・研究を生業として定年まで仕事を持ち続け、母校の大学に通う毎日となるとは、不思議なめぐり合わせである。

毎年入れ替わる若い人達と接していて、自分だけは歳を忘れていられるこの仕事は結果的には最高であった。助手になって早々、「学生に対しては常に上位で『わからない』と言ってはいけない」とベテラン助手が忠告してくれた。けれども私はいつも友達感覚で、ちょっと先輩風を吹かせ、お姉さんのつもりできた。ところが、とっくの昔に学生の親の歳を超え、あだ名は随分前から「お母さん」であったことを聞かされたのはつい最近である。「婆や」まではいかなかったかと苦笑した。いつまでも若いつもりでいたが、定年を目の前にして、故障続きの身体と記憶力の衰えはすっかり身にしてみえた。勤続年数41年、学生時代を加えれば45年間、記憶の定かな人生60年間のうちの4分の3、その一日の大半を屋薬科大学で生活してきたのかと思うと感無量である。

墓に入らず、散骨を希望するような私は、大学に対しても、煙のように跡形もなく消えたいと思ってきた。そうしたこともあり、このような一般教育論集の貴重なページを「随想」で埋めるように求められた時、困ったが、専門科目の生化

学教室から教養の生物學研究室に異動して12年、仲間に入れていただいた御礼を書き留める機会を戴いたと思い直し、拙文を載せていただくことにした。

母校

「医薬品化学研究所」建設の設計の段階で、「邪魔なイチヨウを数本切れば良いのに、そう思いませんか？」と、また「新星館」建設の時には「学長室や事務室を新星館に入れて、本館は書庫と講堂で遺物扱いにしたら」という案が官学出身者の教授達から真顔で提示されるたびに「卒業生には考えられないこと」とむきになって否定したことを鮮明に覚えている。

本館に向かうイチヨウ並木、芽吹いた頃からいっちょまえの扇型をしている5ミリほどの葉が日ごとに大きくなるのを微笑ましく見上げながら歩いた春、燃えるような山吹色のトンネル並木、厚く積もった落ち葉を踏む音と蹴散らしながら歩く感触、小学校の頃から好きで憶えていた与謝野晶子の「金色の小さき鳥のかたちして銀杏散るなり夕陽の岡に」の光景そのものだと思いつながら、青空をバックに舞い散る葉をいとおしく見上げて歩いた秋。それはもう、この夏に逝ってしまわれた尊敬してやまない故緒方敏子先生の代表作の写真集、「星薬科大学の四季」に出てくるイチヨウ並木と本館の丸い屋根の名場面そのものを毎日、毎日、思い出す日々であった。

縁と運

学生との雑談で「就職と結婚は縁と運で決まる」とよく言ってきたが、最近の自分の経験から「生死」も「縁と運」で

左右され、良い医師との出会い、選んだ病院次第で「生命の質も長さも」決まることを感じ、「就職も結婚も寿命も縁と運で決まるものだ」と確信した。人生は皆、紙一重のところ運、不運が決まり、人はそれを運命と受け止めるのだろうかと思う。「いつまでもあると思うな親と金、ないと思うな運と災難」は母親の口癖だった。

飄々と流され、私利私欲をむき出しにしない緩やかな生き方に憧れる。私は宗教に頼る気持もなく、合理主義で諦めの悪い性分である。「人事を尽くして天命を待つ」の、何に対しても精一杯やる、最後まで諦めず頑張った結果を前向きに受け入れる精神が好きだ。そして短い人生、信念のゆるぎなく、筋を通して納得のいく生き方を最後までしたい。たとえ、運、不運に左右される人生だとしても、である。

放医研で学んだ自由

ある日、卒論教室の石川信雄教授に呼び出され、自宅が誰よりも千葉に近い東京の下町ということで放医研（科学技術庁 放射線医学総合研究所、薬学部）への就職を紹介された。都心と反対方向の通勤、調剤と関係ない、学術的な堅苦しい研究所、それほど優秀ではないと尻込みする私に石川先生は「東大卒がゴロゴロいる所、良いのを釣ってらっしゃい」と笑顔で言われた。ビキニ被曝事件がきっかけでできた国立の研究所で第一線の研究者達が放射線障害などを物理、化学、生物、遺伝、臨床、薬学などあらゆる角度から研究し、隣の建物の付属病院は放射線による最新のがん治療を試みていた。作家の高見順が入院して亡くなった頃だった。寮や宿舍が隣接しており、夜中まで研究する優秀な若い研究者が多かった。しかし、院生気質が残っているのか、留学経験からの欧米スタイルなのか、国家公務員だからか、昼休みや5時を過ぎると仕事をピタッと止めて各研究室から三々五々と出てきて、芝生で混ざって輪になってバレーボールに興じたり、テニス

コートや所内の道路でラケットを振り、山やスキーツアーや部対抗のソフトボール大会が企画され、私も仲間に入れてもらって楽しんだ。有名な偉い先生もパートのおばさんも対等に雑談ができる研究所の自由な空気は大学や病院や薬局では味わえない独特の雰囲気であり、良い経験をさせて貰った。

放医研では夏、冬の僅かな休み以外はフルに毎週毎に200匹のマウスを購入し、自ら確立したばかりの「効力試験法」であらゆる化合物の効力試験を行うのが仕事だった。さすがに国立の研究所で、動物代だけでも考えられない額だった。スクリーニングにかけた薬物は市販品に止まらず、置換基を変えた新しい関連化合物を次々と合成し、提供してくれる有機合成部門、製薬会社の研究段階で合成され、持ち込まれる一連の関連化合物類など多数で、効力試験の結果は統計処理の教科書をかくような統計学・推計学に詳しい先生のアドヴァイスを得て処理された。投与薬物が溶液になった時や体内で吸収される時の変化を追求する分析部門など、薬学部の中に蒼々たるメンバーからなる各部門の研究室があり、共同作業で多量のデータを報告していった。放射線障害防護薬の開発は薬学研究部の大看板だったのでどの研究室も業務の一部として率先して協力してくれた。石川先生が言われたように放医研には年頃の格好いい、素晴らしい魚はたくさんいたが、釣る気もなく、皆、良き友達となった。2年後、先輩であり、直属上司の篠田雅人先生が母校の星薬に教授として迎え入れることを機会に、請われて助手として一緒に戻り、しばらくお手伝いすることになった。「助手さん」は柄ではなく、同級生の女友達も5人残っていたが、能力もないので、研究、教育関係よりも調剤をやりたいとまだ思いつづけていた時期で、2、3年のつもりで戻った。初めは隣の千葉大学の薬理の院生だった同級生が最も適任と思い、強く推薦したが、彼も自分のテーマが面白い時期で、丁重に断られた結果のことだった。これも縁と運だったかと思う。

女性と仕事

私が小学校1年の時は教室が足りず、半日交代の2部授業であった。第一次ベビーブームの直前である。戦後の復興期で経済的には国全体が貧しかったから、東京の下町では高卒は良いほうで、女子で大学に行かせてもらえるのは相当、理解のある家庭だった。就職する頃は「寿退職」どころか「オールドミス」で職場に踏みとどまるのは大変勇気と辛抱が必要な時代だった。放医研の女性研究者達は保育園に子供を預け、あるいは田舎の実家に長期に預け、学童期にはテーブルコーダーに「おかえり、おやつは……」と入れて工夫しながら仕事と両立させていた。「良妻賢母」が讃えられる時代、男性と対等に仕事するには過酷な環境を開拓しながら頑張ってくれていたのだ。

留学経験豊富な先端に行く放医研の先生達でさえ、男尊女卑の思想を依然持っていて、日本にいれば理解できず、あからさまに、母親業に専念することを薦めた。40年後の今でも大学内の教授達にこの発想が残っており、子育てを頑張っている教員に同性の教授までが自分の研究の為に同じことを発言することに驚くが、この頃は私もそこまでして研究を続けたいという高い向学心に目を丸くした。「女性と仕事」に対する男性の古くて固い頭は今でも「男社会」を守ろうとするばかりで、一握りの男性以外は全く進化してないと思う。「男女共同参画社会」は世界に背中を押されて役人が嫌々ながら作っただけの絵空事である。現に男性の育児休暇どころか残業時間の短縮、家事への参加時間さえも全く増えていない。仕事も家庭も大事にする人生は男女を問わないはずなのに女性だけが頑張っているだけで、働き方の見直しが優先されていない。少子化対策の問題点はここにあるのに、補助金ばかりばらまいていれば解決すると思うのは「男性」の発想である。このような時代に私が家庭と仕事をなんとか両立して今日まで働けたのは上司の篠田先生ご自身が共働きで、夫

人の職業を認めていらした一握りの男性側であったという幸運なクジを引きあてたからで、家庭でおこる緊急事態に理解があったからに他ならないと感謝している。家族の健康と理解と協力も大きかった。

大家族のなかで

私は6人兄弟の末っ子で、早生まれで内気な甘えん坊だった。自営業を家族で営む両親は甘かったが、6歳から19歳も年の違う兄や姉達がシビアに干渉してくるし、「サッカリンのように甘い」という皆の総攻撃を受けとめながら、早く大人になりたいと思いつつ育った。何事も父権や歳の差に関係なく、家族の多数決による総合的な判断で決まり、おやつも平等に分けられた。母親が上手に切り分けた西瓜は真っ先きに選んで良かったがどれも同じ大きさに見えて、困る姿に皆が笑った。兄や姉の戦争中の助け合い、我慢してきた苦勞話を聞かされ、子供といえども地方から出てきている住み込みの若いお手伝いさんや店員さん達が家族の一員と感じて貰えるよう相手の気持になって常に心遣いをするように厳しく教えられた。

太学の中でも縁の下で支えてくださる仕事が多々あってこそその日常だとも思っている。その背景はこの環境にあったと思う。

ライフワーク

放医研の仕事がライフワークとして継続できたことも幸運だった。放射線障害防護薬の基礎知識とデータを抱えながら

戻ってきた大学の5号館は空っぽの大きな部屋と実験台だけからスタートした。放射線には未練があったが放医研のようなX線技師の資格と鉛で遮蔽した部屋の必要なX線発生装置は到底無理な話で、臓器からの蛋白質の抽出と精製を始めた。篠田先生も思いは同じで写真撮影用の軟X線発生装置を応用してX線障害の研究が何とか大学でできないかと考えられ、試行錯誤しながら色々試みた。

その結果、特注した機械で長波長をカットするフィルターと電圧、照射ケージの材質と型と方法を工夫したり、また、電子レンジの中のように10匹のマウスが丸い容器の中でひしめき合いながら、均一に被曝するようにボックスに回転台を持ち込んだ。また照射室はできる限り大きなボックスにして、照射中のマウスの体温の放熱による室温上昇を防いだ。これらの結果、ボックス外に放射線が漏れることもなく、技師の資格がなくても、普通の部屋に設置できる安全な軟X線発生装置を用いて3倍の照射時間で深部照射用の硬いX線と同様の効力試験が可能なることを発見した。また軟X線の特徴から低電圧でフィルターを外すことにより、透過力の低い、長波長のX線だけを表皮にのみ被曝させることが可能とわかり、癌治療時に問題となる放射線皮膚障害を予防する「放射線皮膚障害防護薬」の研究を新しく確立できた。

このような写真撮影、非破壊検査用軟X線発生装置の利用法は報告がなく、従来の機械ではできない実験も可能となり、後に放医研も同じ機械を購入するほど注目された。

照射後20日前後に発生するマウスの背部全体の脱毛や潰瘍などの皮膚障害が照射直前に1回だけ注射した薬物の効果により障害が全くおこらず、白い毛のままにいるマウスの写真は学会で説得力があった。また癌の放射線治療時の重大な副作用としておこる造血機能障害に対する防護薬の研究も、自動血球測定装置のない頃からメラニンジュールで採血し、顕微鏡で白血球を数えた。この作業は共同実験者の同僚の助手さん、院生、卒論生の人達の協力による人海戦術の可能な大学でしかできない実験だった。後に自動血球測定装置を購入して貰っても毎日100匹のマウスの眼底静脈から一定量を採

血して、赤血球、白血球、血小板を測定する実験の繰り返しは大変だった。また先の皮膚障害も80匹前後のマウスの背中の障害部位の面積を毎日、毎日、1匹ずつ定規で測り、脱毛、潰瘍とスコア表で換算し、数値化し、記録していくのは大変な作業で、何代もの卒論生と一緒に頑張ってくれたお蔭で膨大な結果が報告できた。

放射線障害防護薬の開発も放医研時代の化合物に加えて、生薬学教室と共同で、生薬の抽出物や分画物の効力試験を繰り返し、有効成分を追跡した。1カ月かかる動物実験の結果を早めに予測し、分画を進めて貰う、生薬成分の構造決定にはミリグラム、マイクログラム単位の量で十分な試料を、動物実験では1回にグラム単位で使ってしまう、その感覚に慣れるまで、生薬の故桜井信子助教授は大変だったようだ。ある会社でセンキュウの放射線障害に対する有効成分についての講演を頼まれ、二人で説明した時、「生薬分野と薬理分野の二人があ・うんの呼吸で良くここまで仕事ができましたね」と感心された。桜井先生とは公私にわたって親友として、何でも言えた間柄の合作だったからであろうと思う。

放射線障害防護作用のある生薬、漢方薬、民間薬は想像以上に多かった。漢方薬がブームになる前の話である。特に生薬以外のメグスリノキ⁽⁸⁹⁾、イチヨウ葉⁽⁸⁸⁾、キダチアロエ⁽⁹⁰⁾、クロレラの成分にも強い効果が認められ、有効成分を追った。最近、これらがどれもサプリメントとして市場を出回っているが、私たちが注目して実験していたのは約20年前のことであつたと懐しく思い出す。その他、聖マリアンナ医大に転出された鴨川 旭先生との共同実験でラットを用いた実験的肝障害に効く薬や利胆作用のある薬の研究ができ、放射線に止まらず、幅を持てたことが幸運にも仕事が続けられた一因だと思う。これら総てのテーマが同僚、院生、卒論生の方々の協力が得られてこそ実現した研究で有難かった。

篠田先生が定年退職された後は生化学から生物学に配転になった。この人事の会議の席で、入江昌親教授が研究継続について発言してくださったお蔭で一般教養部門でも細々と研究を続けることが認められたと、後に伺い、入江先生に感謝している。その程度に認められたもので、実験室とオフィスは離れて点在する空き部屋に転々と移動し、生物学卒論

生の指導に支障をきたした。それでもこのような環境の中で、鴨川先生の応援を得て、卒論生の一人、松田信治君が修士の学位を取り、「放射線障害と一酸化窒素の関係」の研究論文が英文で発表できた。最近の第二新館完成後はオフィスと共にやっと続きの研究室を与えられ、「放射線障害とメタロチオネインの関係」などの実験も加えることができた。

この数回の引越と、どこへ行っても実験台はいつも学内の余り物から調達せよと言われて探し回る日々で、今までに新設は実験用流し台1台だけとは寂しい限りであった。しかし、その度ごとに管財の方々が全員で補修したり、ペンを塗りなおしながら、「先生、きれいにしておげるから大丈夫だよ。」と笑顔で汗を流して新品のように据え付けてくださり、励ましてくださった。学内のあちこちに好意を示してくれる応援団がいてくれて、いつも助けてもらいながら研究を続けられる喜びは何ものにも代えがたかった。

第二新館一階の実習室は使用する薬理の三澤教授と生物の私の二人だけに任されて実験台の高さから、通路の幅、配置、電源ときめ細かく設計した。当時は相当痛みが酷かった脚を引きずりながら、学内を回って、経済的で、学生がより使いやすい実習室を目指した。完成後、実際に本番で使って満足のいく実習室ができたと思った。しかし、一人研究室からいよいよ助手さんを付けて貰い、二人体勢で「生物学の実習」を本格的にと認められ、秦 直美助手を迎えて張り切った途端、蒿に油揚げをさらわれ、残念な結果になった。後になって今までの度重なる引越と研究室の備品探しが原因となり「一生、手術は要らない」と保証されていたはずの股関節は悲鳴をあげ、人工股関節にせざるを得なくなった。これは不運の部類だが、多くの幸運の中では致し方ないことだろう。

生物学に看板を変えて12年間のうち8年間は一人研究室で社長兼小使いの目の回るような忙しさの連続だった。その頃は、卒論の実験以外に「生物実習」の準備・指導などの助手の仕事を卒論生達が積極的に手伝ってくれた。それでも毎年、卒論生は定員オーバーになるほど希望してきてくれたのがとても嬉しかったが、オフィスと離れた実験室ということも

あつて十分な指導もできず、申し訳なく、未だに悔いが残っている。

教員として

この43年間、研究上では余り競争相手のいない放射線関係の仕事だったので、南原学長に「これからはライフワークとして細々と」と言われた通り、誰もできない膨大な仕事がつくりできたことに感謝している。

一方、教育面で伝えたかったのは「人間性」と「自分の頭で考えて判断する習慣」特に「放射線生物学」の中では、放射線を正しく理解してアレルギーにならないことと、原子力発電の功罪についてであった。放出される放射能が半分になる（半減期）に2万4131年もかかるという、どんな方法でも分解できない、今まで地球上になかったはずの、プルトニウム239が原子力発電を運転する度に必ず生じ、積み上げられてゆく。代々、万年単位で放射線を出しつづける事実を知った上で、日本にとってこの発電方法が本当に最良なのか考えて欲しかった。事故隠しが露呈し、「安全神話」が崩れ、地震大国の中で活断層の上に建つ原子力発電所、解決されていないその廃炉、廃棄物の行方について、危険を知った上で、放射線障害の知識も加えて欲しかった。原子力発電に対するものと太陽光発電などその他の発電方法への国からの研究開発補助金に雲泥の差があることなどの政策についても。

そして節電は二酸化炭素を半減させるためだけではないことなどについても関心を持って欲しかった。コンビニや自動販売機が24時間動いているような他国にない生活が快適なのか、それに伴う働き方も含めて、考えて欲しいと訴えた。選択科目の時も必須の時も全体的には、毎年多くの学生が受講し、とても熱心に聞き、考えてくれたと自己満足している。

教職員の一員としては後に続く人たちに僅かながらもレールが引けたと思っている。課題はあるが、家庭と仕事の両立は大昔に比べれば大分、マシになってきたと思う。

任期制導入反対は今でも正しかったと思っているし、あの時、一緒に危機感を持ってくださった方が大勢いて、全体のために自身の身の保全や危険を顧みないで賛同してくださり、星葉にも良識がまだあったと嬉しかった。後にガラス張りの組合をと組合改革を試みた時も、新しい役員達は忙しい時間を割いて集まり、毎月、毎月、終電まで意見を交わした。皆で大学のことを案じ、話し込んで、協力していただいた。難問だらけだったが、充実感に満ちた楽しいひと時だった。

私は柄にもなくその人達に何かをお返ししたいと思って、他の3人の役員と一緒に前代末聞の立候補までして組合長を引き受けてみたものの、2年間、壁が厚く、何もできなかった。正義ではなく政治力がものをいい、教育ではなく研究力だけが評価される大学であってはならないと思うが、この先、星葉の伝統は受け継がれていくのだろうか。

十数年前、医師、看護師、保健師、教員、評論家などが集まり、「性と健康を考える女性専門家の会」が立ち上げられた。薬学出として主治医でもあった会長に誘われ、一緒にゼミで勉強した。これを機会に、大学内とはまったく別の外の風にあたり始めた。この会は女性の健康、生き方、働き方を見直そうとする目的で、初めは9年間も先延ばしされ、世界で承認は数カ国という状況だった低容量ピルの承認要求が第一歩であった。先延ばしされている理由はエイズが流行る、環境ホルモンに関係するなどで、各学会がすでに否定していたにもかかわらず、女性の委員が一人も入っていない不思議な厚生省の審議会に放置されていた。しかし、突然でてきたバイアグラが死者も出ている中、申請半年で承認されようとした時点で厚生省に再三抗議して、やっとピルも承認された。その結果、避妊薬としてだけではなく、月経困難症などの治療に良報となった。次に男性中心だった医療現場の感覚を見直した結果、女性専門外来があちこちの病院で設けられるよ

うになった。働き方も、職場のハラスメントも、鬱も禁煙も性教育も話題にしている。「Women's Wellbeing」が会の言葉である。

セクシャルハラスメントについてはあちこちの講演会にも早くから参加し、時代の流れを感じた。キャンパス・セクシャル・ハラスメント全国ネットワークの会員になり、様々な大学の情報をキャッチした。大学の危機管理の問題として位置付けられていたことから、星葉にもセクシャルハラスメント防止規定を提案し、導入していただいたが、星葉では現在でも全学的な啓蒙が相当不足しているので、規程があるだけにはならないよう祈っている。防止委員会のメンバーになっても、実際に起こった問題についてはどんなに頑張っても解決できなかった。アカデミックハラスメント、パワーハラスメントの被害者に対しても十分な救済ができていないのが現状である。黙って去って行った人達の無念さを悲しく思ひ出す。この点はずっと頑張りたかったと今でも残念に思う。

昔から、星葉の学生が病院実習に行っても就職しても「星葉のカラー」といわれるものがあつた。現役の教職員の中で、どのくらいの方がご存じだろうか。

乱立した薬科大学の中でこれから生き延びていくには人物的な評価「星葉のカラー」が必要と思われる。しかし研究至上主義、研究費稼ぎが高く評価され、外に向かつて忙しい教員ばかりになってしまつては大学としての格好はいつても、きめ細かい教育から、人間的に素晴らしい学生は生まれないのではと危惧する。

15年前のカリキュラム変更時には「これまで以上の教養のある薬剤師の養成」が目的だったと聞いている。その時から、実際にこれまで以上というより、以下にならないように食い止められたかも疑問である。星葉だけの問題ではなくなっているかもしれないが。

やっと最近になって話題になってきたが、小中高時代の教育方針が偏向したままできて、久しい。受験3科目以外は殆ど理解しないまま各科目は時間短縮され、実際、「生物」など中学以来という学生が大勢いる。大学で補講的に組み込んだカリキュラム「高校の接続教育、『生物』を受講しなかった」と言う。「何故?」「単位が取り易いと先輩から聞いた『物理』にした、『化学』にした」と。パソコンが普及して漢字が書けない、話をじっと聞けない、長くもない文章を斜め読みにして内容を取り違える。これでは薬剤師としては失格である。社会に出てからは決して通用しない、一般教育以前の問題に直面している。しかし、社会に送り出すときは責任ある薬剤師として一人前にせねばならない。それでは、何をどのよう指導すればよいのか。基礎学力も薬学の専門も充分修めなければならないが、さらに人間性、優しく協調性のある星葉カラーを身につけてもらいたい。「人間として大切なのは良い人になることでも立派な大人になることでもなく、人の痛みを放っておけない心をもつことだ」とは長年ボランティア活動をしてきて、最近、60を過ぎて、やっと気がついたという人の言葉である。医療人としては是非この心も養っていただきたい。一般教養の先生方が新たにチームを作って検討を始めている。若々しい発想に大いに期待している。

これからは大学の外から「星葉科大学」と聞くとびに今まで以上に反応してしまうような気がする。あのイチヨウ並木を懐かしく思い出すだけなら良いが。

私の生涯の大部分を占めた大学の生活は「様々な角度からのものの見方」、「ブレない心」、「真心」を教えてくれた。これほど多くの人々に交われる職業に出会わなかったら、今日の自分はいなかったと思う。ここまで育てていただいたことに感謝したい。そして、寛大な心で接し、見守ってくださった多くの皆様に心よりお礼を申し上げます。